

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゅ うせ え いしゅよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を  
 救 世 主 人 墓  
 ふ うじ て 、 へ い そ つ なん ぢ の い さ ぎ よ き み を  
 封 兵 卒 爾 潔 軀  
 ま も る と き 、 なん ぢ は み っ か め に ふ く か つ  
 守 時 爾 三 日 目 復 活  
 し て 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。  
 世 界 生 命 賜  
 ゆ え に て ん ぐ ん は なん ぢ い の ち を ほ ど こ す の  
 故 天 軍 爾 生 命 施  
 しゅ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は  
 主 呼 光 榮  
 なん ぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お え い は なん ぢ  
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾  
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む  
 國 歸 獨 人 慈  
 しゅ よ 、 こ う え い は なん ぢ の お も ん ぱ か り に  
 主 光 榮 爾 慮  
 き す 。  
 歸

【 生神女就寝祭のトロパリ 第1調 】

しょ う し ん ぢ ょ よ 、 なん ぢ は う む と き ど う て い  
 生 神 女 爾 産 時 童 貞

を ま も れ り 、 ね む る と き せ か い を の こ さ  
 守 寝 時 世 界 の 遺  
 ざ り き 。 な あ ん ぢ は い の ち の は は と し  
 爾 あ ん ぢ は い の ち の は は と し  
 て い の ち に う つ れ り 、 な ん ぢ の き と う を  
 生 命 移 爾 祈 禱  
 も っ て わ れ ら の た ま し い を し よ り の が れ し  
 以 我 等 靈 死 脱  
 め た も お う 。  
 給

【 復活のコンダク 第1調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、  
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸  
 し ゅ さ い よ 、 な ん ぢ は か み な る に よ り て こ う  
 主 宰 爾 神 因 光  
 え い の う ち に は か よ り ふ く か つ し 、 せ せ  
 榮 中 墓 復 活 世 世  
 か い を も と も に ふ く か つ せ し め た ま え り 。  
 界 借 復 活 給  
 ひ と の せ い は な ん ぢ を か み と し て ほ め う  
 人 性 爾 神 讃 歌  
 た い 、 し は ほ ろ ぼ さ れ 、 ア ダ ム は た の し  
 死 滅 樂

み、エヴァはいまなわめよりとかれ  
今 縛 釋

てよろこびてよぶ、ハリストスよ、なんぢ  
觀 呼 爾

はしゅうじんにふくかつをたもうしゆなり。  
衆 人 復 活 賜 主

【 生神女就寝祭のコンダク 第2調 】

いまでもいつもよよに、アミン。  
今 何 時 世 世

きとうにねむらざるしゅうしんぢよ、てんたつに  
祈 禱 眠 生 神 女 轉 達

かわらざるたのみなるものおを、ひつ  
變 倚 望 者 枢

ぎとしとはとどめざりいき、けだし  
死 留 蓋

えいていどうぢよのたいにいりしものお  
永 貞 童 女 胎 入 者

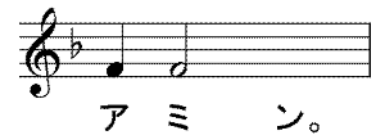
はかれをいのちのははとしていのちに  
彼 生 命 母 生 命

うつしたまえり。  
移 給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖神 聖勇毅 聖  
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
 常生者 我等 憐  
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖神 聖勇毅 聖  
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
 常生者 我等 憐  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖神 聖勇毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。  
 こうえいはちちとことせいしん神にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。  
 せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅ な よ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ぎ もの</sup>ヘルヴィムに座する者よ、<sup>なんぢ そのくに</sup>爾は其國  
 の<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ</sup>光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、<sup>いま いつ よよ</sup>今も何時も世世に、 )

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅ な よ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ぎ もの</sup>ヘルヴィムに座する者よ、<sup>なんぢ そのくに</sup>爾は其國  
 の<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ</sup>光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、<sup>いま いつ よよ</sup>今も何時も世世に、 )

**【 プロキメン 提綱 主日第1調 】**

司祭) <sup>つつし き</sup>慎みて聽くべし、<sup>しゅうじん へいあん</sup>衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup>爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>しゅ われらなんぢ たの ごと なんぢ あわれみ われら た たま</sup>プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐れみを我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 わ れ ら な ん ぢ を た の む が ご と く 、  
 主 我 等 爾 頼 如  
 な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま  
 爾 憐 我 等 垂 給  
 え 。

誦經) <sup>ぎじん</sup> 義人よ、<sup>しゅ</sup> 主の爲に <sup>よろこ</sup> 喜べ、<sup>さんえい</sup> 讚榮するは <sup>ぎしや</sup> 義者に <sup>かな</sup> 適う、

しゅ よ 、 わ れ ら な ん ぢ を た の む が ご と く 、  
 主 我 等 爾 頼 如  
 な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま  
 爾 憐 我 等 垂 給  
 え 。

誦經) <sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>われらなんぢ</sup> 我等爾 <sup>たの</sup> を <sup>ごと</sup> 頼むが如く、

な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま  
 爾 憐 我 等 垂 給  
 え 。

【 <sup>アポストロス</sup> 使徒經 131 端 コリント前書 4 章 9 節～16 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パウエルが <sup>じん たつ</sup> コリント人に <sup>ぜんしょ</sup> 達する <sup>よみ</sup> 前書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹みて <sup>き</sup> 聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>われおも</sup> 我意うに、<sup>かみ</sup> 神は <sup>われらしと</sup> 我等使徒を <sup>すえ</sup> 末なる <sup>もの</sup> 者と爲して、<sup>し</sup> 死に <sup>さだ</sup> 定められたる <sup>もの</sup> 者の <sup>ごと</sup> 如く <sup>あらわ</sup> 顯



われら せかい ため てんしとおよ ひとびと ため みもの な われら  
 せり、我等は世界の爲、天使等及び人々の爲に、観玩と爲りたればなり。 我等はハリス  
 トスに<sup>よ</sup>困りて愚なり、爾等<sup>なんぢら</sup>はハリストスに<sup>おい</sup>於て<sup>ち</sup>智なり、我等は<sup>われら</sup>弱く、爾等<sup>なんぢら</sup>は<sup>つよ</sup>強し、爾等  
 は<sup>えい</sup>榮を<sup>う</sup>享け、我等は<sup>われら</sup>辱<sup>はづかしめ</sup>に<sup>お</sup>處るなり。 今に<sup>いま</sup>迄<sup>いた</sup>まで我等は<sup>われら</sup>飢え、<sup>う</sup>渴き、<sup>かわ</sup>裸<sup>はだか</sup>程になり、<sup>う</sup>撻  
 たれ、<sup>さだま</sup>定<sup>お</sup>り居る<sup>ところ</sup>處なく、<sup>ろう</sup>勞して<sup>て</sup>手<sup>わざ</sup>づから<sup>な</sup>工<sup>われらののし</sup>を作す。我等<sup>われら</sup>詈<sup>しゆくふく</sup>られては<sup>きんちく</sup>祝福し、<sup>し</sup>窘逐  
 せられては<sup>しの</sup>忍び、<sup>そし</sup>謗<sup>いの</sup>られては<sup>われら</sup>禱<sup>よ</sup>る、我等は<sup>あくた</sup>世の汚穢<sup>ごと</sup>の如く、<sup>しゅう</sup>衆<sup>ふ</sup>の<sup>ところ</sup>踐む<sup>ちり</sup>所の<sup>ごと</sup>塵垢の如く  
 せられて<sup>いま</sup>今<sup>いた</sup>に至<sup>われ</sup>れり。 我は<sup>なんぢら</sup>爾等<sup>はづか</sup>を<sup>ほつ</sup>愧<sup>これ</sup>しめんと<sup>しよ</sup>欲<sup>あら</sup>して<sup>すなわちわ</sup>此<sup>あい</sup>を書<sup>い</sup>するに<sup>い</sup>非<sup>い</sup>ず、<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>我が<sup>い</sup>愛  
 する<sup>ところ</sup>所の<sup>こ</sup>子の<sup>ごと</sup>如<sup>なんぢら</sup>く<sup>おし</sup>爾等<sup>けだしなんぢら</sup>を<sup>おい</sup>訓<sup>ばんにん</sup>うるなり。 蓋<sup>しふ</sup>爾等<sup>しふ</sup>には、<sup>おい</sup>ハリストス<sup>ばんにん</sup>に<sup>しふ</sup>於<sup>しふ</sup>て<sup>しふ</sup>萬<sup>しふ</sup>人<sup>しふ</sup>の<sup>しふ</sup>師<sup>しふ</sup>傅<sup>しふ</sup>あ  
 りと<sup>い</sup>雖<sup>い</sup>、<sup>い</sup>多<sup>い</sup>くの<sup>い</sup>父<sup>い</sup>ある<sup>い</sup>なし、<sup>い</sup>我<sup>い</sup>ハリストス<sup>い</sup> イ<sup>い</sup>エス<sup>い</sup>に<sup>い</sup>於<sup>い</sup>て<sup>い</sup>福<sup>い</sup>音<sup>い</sup>を<sup>い</sup>以<sup>い</sup>て<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>等<sup>い</sup>を<sup>い</sup>生<sup>い</sup>み<sup>い</sup>た  
 ればなり。 故に<sup>い</sup>我<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>等<sup>い</sup>に<sup>い</sup>求<sup>い</sup>む、<sup>い</sup>我<sup>い</sup>に<sup>い</sup>效<sup>い</sup>いて、<sup>い</sup>我<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ハリストス<sup>い</sup>に<sup>い</sup>於<sup>い</sup>ける<sup>い</sup>が<sup>い</sup>如<sup>い</sup>く<sup>い</sup>せよ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 神はわたしたち使徒を死刑囚のように、最後に出場する者として引き出し、こうしてわたしたちは、全世界に、天使にも人々にも見せ物にされたのだ。わたしたちはキリストのゆえに愚かな者となり、あなたがたはキリストにあって賢い者となっている。わたしたちは弱い、あなたがたは強い。あなたがたは尊ばれ、わたしたちは卑しめられている。今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦勞して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉をかけている。わたしたちは今に至るまで、この世のちりのように、人間のくずのようにされている。わたしがこのようなことを書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、むしろ、わたしの愛児としてさとすためである。たとえあなたがたに、キリストにある養育掛が一万人あったとしても、父が多くあるのではない。キリスト・イエスにあって、福音によりあなたがたを生んだのは、わたしなのである。そこで、あなたがたに勧める。わたしにならう者となりなさい。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) 爾<sup>なんぢ</sup>に<sup>へいあん</sup>平安、

誦經) 爾<sup>なんぢ</sup>の<sup>しん</sup>神にも、

司祭) 睿智<sup>えいち</sup>、

誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう</sup> 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、



誦經) <sup>おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ</sup> 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世々に  
<sup>た もの われなんぢ な うた</sup> 垂るる者よ、我爾の名に歌わん、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ し</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思  
<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠  
<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ</sup> ぶを畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ  
<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神  
<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし</sup> よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至  
<sup>ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。 )

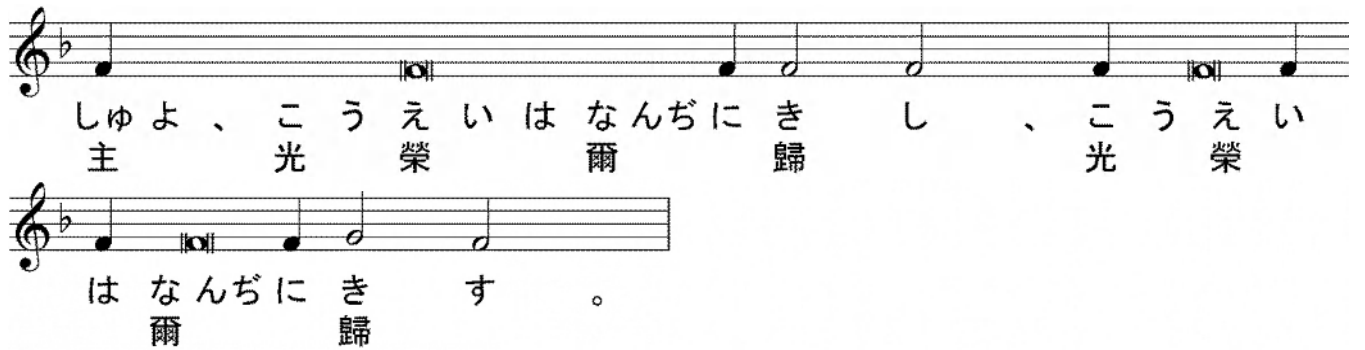
【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書72端 17章14~23節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、





司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時或人イイスに就きて、跪きて曰えり、主よ、我が子を憐

め、彼癩癩を患いて、苦むこと甚し、蓋屢火に倒れ、亦屢水に倒る、我

之を攜えて、爾の門徒に就きたれども、彼等醫すこと能わざりき。イイス答えて曰え

り、噫信なき悖れる世や、我何時までか爾等と偕に在らん、何時までか爾等を忍ばん、

彼を此に我に攜え來れ。イイス魔鬼を禁めたれば、魔鬼出でて、其子斯の時より愈え

たり。其時門徒私にイイスに就きて曰えり、我等が之を逐い出す能わざりしは何の故

ぞ。イイス彼等に謂えり、爾等信なき故なり、蓋我誠に爾等に語ぐ、爾等若し

芥種の如き信あらば、此の山に、此より彼に移れと言うとも、移らん、又爾等に

も能わざること勿らん。此の類に至りては、祈祷と齋とに由らざれば出でざるなり。ガ

リレヤに在る時、イイス彼等に謂えり、人の子は人人の手に付されん。且彼を殺さん、

而して第三日に彼復活せん、

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) ひとりの人がイエスに近寄ってきて、ひざまずいて、言った、「主よ、わたしの子をあわれんでください。てんかんで苦しんでおります。何度も何度も火の中や水の中に倒れるのです。それで、その子をお弟子たちのところに連れてきましたが、なおしていただけませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な、曲った時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまであなたがたに我慢ができようか。その子をここに、わたしのところに連れてきなさい」。イエスがおしかりになると、悪霊はその子から出て行った。そして子はその時いやされた。それから、弟子たちがひそかにイエスのもとにきて言った、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。するとイエスは言われた、「あなたがたの信仰が足りないからである。

よく言い聞かせておくが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。しかし、このたぐいは、祈と断食とによらなければ、追い出すことはできない」。彼らがガリラヤで集まっていた時、イエスは言われた、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、そして三日目によみがえるであろう」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③（金口イオアン）へ